
俺様王子の恋愛街道

淡路ゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺様王子の恋愛街道

【Nコード】

N2414W

【作者名】

淡路ゆき

【あらすじ】

俺様王子（実はヘタレ）に腹黒従者、高飛車な姫に変態な王。さらに聖女に陰謀にドラゴン！？スタツピア王国第一王子ウォーレンは堅物の女嫌い。そんな彼が聖なる森の姫に恋をした！？コメディありシリアスバトルありの恋愛ファンタジー。

ブローグー俺様王子の悩み事

青年は執務机の上の日記帳を睨んでいた。

壁に掛けられた白いジャケットは胸の部分に大きく王家の紋章が刺繍されている。

絹の薄いシャツ（襟詰めのもの）を着ていたが、暑いので、袖はきちんとまくっている。

この国特有の栗色の長い髪は、高い位置で、一つに束ねて、下ろしている。

ここは大陸の中央に位置するスタッピア王国。温暖な気候な今は、少し動くだけで汗が滲む。

机の端には、昨日の夜中に処理した書類の束が、これでもかというくらい積み上げられている。錘おもりで押さえているが、窓は開いているので、時折吹く風によって、ぴらぴらと裾が舞い上がる。

インク壺が三つ、羽根ペンが二本、ペンナイフが一本、机の端に転がっていた。

書いてはペンを止め、書いては、頬杖を付き、落ち着きがない。しまいに、書きかけてとうとう立ち上る。

この人物こそ、スタッピア王国第一王子である、ウォーレン・デア・スタツピアだった。

ウォーレンは眉根を寄せ、日記帳を閉じる。

（ああ？ 俺が欲求不満だと？）

認めたくないが現実であった。

そもそもウォーレンが日記を書いたのは今日が初めてである。幼馴染みの伯爵家の子息・ツールに「最近溜息が多いですよねえ」なんて言われて、反論したのが切っ掛けだ。

しかし、反論したのは良いものの、改めて考えてみると、確かに

多いかもしれないと思い、巷で流行っている、日記というものを書いてみることにしたのだ。

（しかし、あれは誰なんだ）

悩みというのは、こうだった。

ウォーレンは最近よく夢を見る。

堅物なウォーレンには珍しく女性の夢だ。大地の女神のような人だ、とウォーレンは思っている。細かい印象などは曖昧で、幼い、と感じることもあるし、老婆のようだ（失礼だが）、と思うこともある。

だが、毎回、同じ人物だということは、直感で分かっている。

その女性を性的に犯すという類のものではない、とウォーレンは思いたかったが（なんせ夢なんてものは、大概曖昧なものである）、いかんせん、ウォーレンは潔癖である。

女嫌いとはではないが、好きではない。

面倒くさいと思っている。そのウォーレンが。

（まさか、昔の初恋が今頃になって？）

苦い過去の思い出である。しかし、ウォーレンの心の声は否定する。

（あいつはこんなに美人じゃなかったぞ）

妙なところを確信している。

（それとも本当に欲求不満なのか？）

ウォーレンは、今年で十八になる。スタツピア王国第一王子であ

る。第一王位継承権を持つ者である。当然婚約者もいる。しかし、婚約者である隣国ピアシアの第一王女キュイリは高飛車な性格なので、ウォーレンは好いていなかった。いや、ここは白黒つけておこう。はっきり言って嫌いなのである。

（だからか？ キュイリの代わりの理想を求めたのか、俺は！ 夢に）

はんつ、と、ウォーレンは自嘲した。馬鹿げている。実に馬鹿げている。しかし事実である。納得がいかないのは当の本人だけである。

（これじゃあ、あの変態親父と同じじゃないか）

ウォーレンの父親は無論、この国スタツピアの王だ。ウォーレンと違い、女に関して非常に節度がないガートン王は、正妃を合わせて、三十人余りの女性を後宮に囲っている、無類の女好きである。堅物のウォーレンからしたら信じられない女つたらしである。

（そんなのは、認めない。絶対に認めない！）

心の声は、余計にウォーレンを打ちのめしていくだけだった。

第一章、俺様王子と不機嫌の種 - 1

「あれ？ 殿下下つてば、どうしたんです？ うな垂れて」

軽いノック音の後に、従者のトールが書類の束を抱えて、執務室に入ってきた。

ウォーレンは顔を上げる。

頭の高い位置で一つに結った真っ白な髪は、突然変異によるものと、ウォーレンは聞いていた。女性が夢見る騎士のように、肌は白く、女のような。本人に言くと怒るのだが。

しかし、身体は、決して華奢ではなく、背は高い方で、しなやかな仕草からは想像がつかないほど、鍛え抜かれていた。が、全体的な線は細い。

ウォーレンの三歳上のくえない従者。

騎士の普段着である、青空を濃くしたような色の軍服を着ていた。トールが、自分の執務机に持っていたものを、ドンと音を立て置き、ウォーレンの方へ歩いてくるのを黙って眺める。

「また、随分な量だな」

「ええ、殿下は仕事が速いからと。はい、陛下からの恋文です」

「あのクソ親父」

トールの曇り空の瞳が曖昧に弛む。

ウォーレンは、トールから、一枚の紙を受け取る。

それは正しくは、ガートン王の従者・スカイからで、一言「お世話をかけます」とあった。

「相変わらず、達筆だな」

まあ、いいか。と、ウォーレンは呟くと、目の前の壁に気付く。

「ん？ なんだよ」

「いいえ？ 殿下にも素直なところがあるんですね」

トールは、にこやかな表情を浮かべて、机の上とウォーレンの顔を見比べている。

「何が……」

トールの視線の先を辿ると、日記帳に行き着いた。慌てて、ウォーレンは日記帳を閉じる。

「別にお前に言われたからじゃないからな」

「わかってますよ」

トールの口角が面白そうに上がる。

「殿下の悩みはそこまで深刻だったんですね。何て書いたのですか？」

「教えるわけないだろ」

すると、トールはふふふ、と意味ありげに笑った。

（コイツ、後で覗き見するつもりだな）

「厭ですね、私にそんな趣味はないですよ」

東に大きく開け放った窓から、穏やかな風が吹く。真夏のスタッ

ピアは、乾燥していて喉が渴くのだ。ウォーレンの口内は、干からびかけていた。

「殿下？ 顔が死んでますよ」

「ふっ、暑さに流石の俺も参ったか」

「下手な現実逃避してないで、書類に集中して下さい。今、ハーブティを持ってこさせます」

トールは呼び鈴を鳴らした。黒を基調とした服が入ってくる。

「殿下に紅茶を。ペパーミントがいいでしょう。頭をすっきりさせていただかなくてはなりませんから」
「かしこまりました」

トールの注文にウォーレンは唸った。

「ミントは苦手なんだ……」

「だから、余計に良いんですよ。味を忘れるために、業務に集中するでしょう？ まだまだやることは山積みですし。殿下にへたばっていただく訳にはいきません」

ウォーレンは馬鹿らしくなって鼻を鳴らした。トールの目尻が可笑しそうに下がる。

「俺がへたばる訳、ないだろう」

「分かりませんよ。殿下はへなちよですからねえ」

「失敬なヤツだな、お前は」

些かむっとして、ウォーレンが答えると「本当のことですから」と返ってきた。

「お前には心遣いというものがないのか」

「私の優しさは全てユイアのものですから」

トールはさらりと、のろけ、を言った。

ユイアというのは、金色の瞳が魅力的だけれども全体的に清楚な印象を受ける、トールの奥方のことだ。

（世の中は平等じゃないよな）

ウォーレンは、引き出しから、お気に入りの手鏡を出して、自分の顔を眺めた。

（こんなに良い男がいまだにフリーだなんて）

ウォーレンは女性に夢を見ている。赤い糸で結ばれた、運命の相手がいると信じて疑っていないかった。

（ああ、俺の片割れはどこにいるんだ）

「殿下にはキユイリ様がいらっしゃるじゃないですか」

「俺はあいつが嫌いだ」

「嫌い嫌いも、好きの内ですよ」

「嫌味か？」

「ユイアは、あげません」

（なんで、コイツは俺の従者なんてやっているんだろう）

そんな考えがウォーレンの頭を過ぎる。しかし、トールは従者としては優秀だった。

「さあ？ 私の父に訊いて下さい」

トールの父親——ガイスター伯爵は十年前まで、大將軍として、王城に勤めていた。

トールが剣技の才能を見せるまでは。

十年前、伯爵家で何があつたのか。ウォーレンは詳しくは知らない。ただ、ガイスター伯爵は、トールに身内殺しをさせた、と。七人いたトールの兄弟が、当時十歳のトールに皆殺しにされた、と、聴いていた。

王城に来たばかりのトールは、子供にしては冷めた目つきをしていた。とてもじゃないが事件について訊ける度胸は、当時のウォーレンにはなかった。ウォーレンはトールに畏怖すら抱いていた。それが変わったのは三年前の冬、トールがユイアに出会ってからだ。

（愛の力は偉大だよな）

と、ウォーレンは思う。

あのトールが柔らかく微笑み、相手を気遣うところなど、それまで見たことがなかったからだ。無理もないだろう。

「へえ、殿下って、私のこと、そんな風に思っていたんですね」

いつの間にか、日記帳に目を通しながらトールが呟いた。

（なんで、俺の考えがコイツに伝わってるんだ）

憤慨しながらウォーレンがトールを睨みつけると。

「口から漏れてますよ。しかし、殿下。これ、欲求不満じゃなかったら何だと思っているんですか？」

「か、返せ！」

ウォーレンはトールの手から、日記帳を奪い取った。

トールは相変わらず見ていて腹の立つ表情をしている。

「確かに、キュイリ様は私も苦手ですけどね」

哀れみの目で見下ろされた。

（油断も隙もありやしない）

それもそうなのだが。

（従者のくせに、なんて生意気なんだ）

「覗き見の趣味はなかったんじゃないのか」

非難を込めた低音で、ウォーレンはトールを責める。

「覗き見じゃありません。殿下の前で、堂々と読んだだけです」

「ものはいいようだな」

「ええ。隙だらけの殿下が悪いんですよ」

（なめられているような気がするのは気のせいだろうか）

本気で悩むウォーレンである。

「そんな殿下に朗報です」

「なんだ」

「午後のお茶にキュイリ様に来るそうですよ」

欲求不満、解消してくればいいじゃないですか」。

トールは爽やかに笑う。

（ああ？ 他人事だと思いやがって）

恨みがましい視線を送ってみるウォーレンだったが、トールに笑顔で流されてしまった。

ダメージMAX。

「仕事するか」

「そうですね」

「あ、そうだ、トール」

「何ですか」？

「第一子の誕生、おめでとう」

トールは一瞬虚を突かれたように、二三度瞬きをした。まばた

「ありがとうございます」

「男子だったな。後で祝いの品を贈らせよう」

「止めて下さい」

馬鹿がうつります」。トールは照れたように微笑んだ。一言余計である。ウォーレンはむっとして言葉を探した。探したが出てこない。

（断じて凶星な訳じゃないからな！）

心の声だけは勇ましいウォーレンである。

（トールは変わったなあ）

王城内では、トールのことを、「視線だけで殺せる」と信じている輩が少なくはない。

それだけ冷徹で残虐なことを行つた過去。

噂は尾ひれをつけて、トールの人物像を大きく歪ませている。けれど。

（トールを変えたユイア殿って、普通の女性なんだよな）

ユイア・マリー・カラカン。中央大陸の最北端にある、カラカン帝国の第三王女。

カラカン帝国の歌姫とも呼ばれている。

ユイアの透き通るソプラノの歌声は、聴く者の心を潤し、癒すという。

トール夫婦は城内の宿舎で生活している。ユイアは昼間、ウォーレンの妹であり今年で十歳になる王女トウズラの相手を務めている。ユイアのお陰で、トールは周囲と馴染みつつある。

正午の鐘が鳴る。ウォーレンは執務室の窓の棧に手を置くと、そこから首都ミンスクの景色を眺めた。

晴れ渡る空はどこまでも続いていく。大地に恵みを落とす太陽は、輝きを失うことはない。

街の上を吹き抜ける風が、生温かった。

第一章、俺様王子と不機嫌の種 - 2

紅茶にいれた氷が、しゃらん、と鳴る。

三時のお茶は酷く不味い。

「お父様ったら、それでわたくしの侍女を辞めさせてしまったの」

噴水のある庭にセッティングされたテーブルとイスは名のある彫刻師に彫らせたものだ。足の先が丸く反っていて、イスの背もたれには薔薇の柄が彫られている。

鮮やかな緑が、目に眩しい。

足の裏で踏む芝生は、ウォーレンの足を心地よく包んだ。

ウォーレンたちは、パラソルで出来た日陰に座り、一息ついたところだった。

スタツピアの隣国ピアシヤの第一王女キュイリの話を見目に、ウォーレンは焼き菓子を摘まんだ。

キュイリは壊れた蛇口のように喋り続けていた。

（女つてのはどうしてこう話のネタが尽きないんだ？）

ウォーレンは目を瞑る。時折吹く爽やかな風は、噴水の冷気を運んでくれる。

「聴いていらっしやいました？ 殿下」

「ああ」

嘘だった。ウォーレンは、話を左から右に聞き流していた。

（どうせ、くだらないことだろう？）

「お父様ったら、横暴にも程があると思いますわ。わたくしのお気に入りの侍女でしたのに」

ウォーレンはキュイリを観察した。小麦色の髪は、後頭部から真っ直ぐに下ろし、前髪を含め淵だけ編み込みの三つ編みがしてある。手が込んでいる、とはウォーレンは思わなかった。ウォーレンの姉妹の中には、もっと派手な髪型を好む者もいる。

キュイリは目鼻立ちにはっきりとしている方だ。きつちりと眉を描き、額をだしている。

ふと、意思の強い眼差しがウォーレンに降った。目が合う。ウォーレンがじっと見つめると、キュイリの方が先に目を反らした。話が切れる。調度良い、と思つて、ウォーレンはキュイリに尋ねた。

「それで、用件は何だ、キュイリ」

「まあ、殿下。わたくしが、殿下に会いに来るのに理由が必要ですの？」

キュイリは東の島国から取り寄せたという、丈夫な紙で出来た大きな扇を口元に寄せる。目くじらを立てるようにあからさまに不機嫌な表情になった。

（だから、女は面倒なんだ）

ウォーレンは内心舌打ちをする。

「用がないなら、俺はこれで失礼させてもらう。仕事が溜まってるからな」

「ええ、そうでしょうとも。殿下はわたくしがお嫌いなんですものね」

「話を極端にしないでもらいたい」

「キュイリ様、殿下は本当に仕事があるんですよ」

後ろから、トールが助け舟を出した。

「黙りなさい、トール。それをなんとかするのが貴方の役目でしょう」

ウォーレンはふう、と息を吐いた。

（手のかかる女だ）

ウォーレンはキュイリの座っているイスを引くと、その額にキスを落とした。

「キュイリの為に、トールが時間を作って、こうして三時のお茶が飲める位の余裕ができたんだ。キュイリの為に、俺は仕事を早く仕上げた」

途端に、キュイリの頬が真っ赤に染まり、とろんとした目つきになる。ウォーレンはうっとりとキュイリに見上げられた。

（まあ、悪い気はしないけどな）

相手は婚約者。将来の妻だ。

「まあ、殿下下ったら。それなら仕方ないですわね。わたくしは帰ります」

「ああ、気をつけて。俺はこれで失礼する」

（早く帰れ）

それでも面倒なものは面倒だった。

ウォーレンは罵倒を飲み込んで、立ち上がる。

第一章、俺様王子と不機嫌の種 - 3

壁の白が目にも染みる。

トールが執務室のドアを開けた。

「どうぞ、殿下」

「ああ」

ウォーレンは部屋に入ろうとしたが、踵を返し、ボタンと音を立ててドアを閉めた。

沈黙が辺りを支配する。

「殿下……？」

トールの不思議そうな声が聴こえたが、ウォーレンは無視を決め込んだ。

目で見たものを疑う。

（何だったんだ、今は）

ウォーレンは今度は自分でドアノブを捻った。

「おー、お疲れさま。キューイリ殿の様子はとうだった？」

どうやらウォーレンの目の錯覚ではなかったらしい。

「なんで、アンタがいるんだ、変態親父」

「ここから、陛下と呼びなさいといつも言っているだろう？ 本

当にウォーレンはお茶目さん、だなあ」

ひくつと、ウォーレンは口元が引きつるのを感じた。

目の前には、ウォーレンのイスに腰掛け、執務テーブルの上で、ウォーレンのお気に入りのカップで呑気に紅茶を嗜む父親（一国の王）の姿があった。ウォーレンと同じ栗色の長髪は、背中の中ほどまである。優しそうな茶色の瞳は明るい色でもちやを見つけた子供のよういきらきと輝いていた。

「いやあ、よくこんなに書類溜めたねえ。感心感心」

「アンタが仕事しないからだろう！」

ウォーレンは怒鳴った。父・ガートン王は、ふっと遠い目をしてずずと紅茶をすすった。

「私はいろいろ忙しいんだよ。スカイ、おかわり」

「はっ」

ガートン王の隣に控えた、長身（といってもトールより低い）の青年が、ワゴンのポットからカップに紅茶を注ぐ。

スカイはガートン王付きの従者だ。褐色の肌は生まれつきだという。この国では珍しい漆黒の髪と瞳を持つ。

スカイも腕は立つが、トールの方が強い、とウォーレンは思っていた。

しゃらん。涼しそうな氷の音。アール 그레이の、すつとするような香りが辺りに漂った。

「何を突っ立っているんだい、ウォーレン。君も座ったら」

ぶち。

ウォーレンの堪忍袋の緒が切れた。

「出てけー！」

ところが、怒鳴られた本人は、平然と紅茶の匂いを嗅いでいる。
ウォーレンは、わなわなと震えた。

「まあ、君もようやく跡継ぎとしての自覚が出てきたんだね」
「何の話です」

ウォーレンがうろんげに王の方を見ると、見覚えのある日記帳が、
ガートン王によって掲げられていた。

「婚約者以外にも、目が行くなんて、堅物の君には珍しいけど。で
も、私としては喜ばしいことだと思うよ」

キュイリ殿とは上手く行きそうにないもんねえ、君。
他人事のように、王は呟いた。

（アンタの尺度で物事を測るな。大体アンタは基準がおかしいんだ）

ウォーレンは盛大に溜息を吐くと、つかつかと足音を立てて、王
に近寄り、日記帳に手を伸ばした。

ひょいと、王が日記帳を動かす。すかっと、ウォーレンの手首
が宙を搔く。

ひょい。すか。ひょい。すか。

ジレンマがウォーレンを襲う。王は、というと、そんなウォーレ
ンを見て、声を立てて笑った。

「ウォーレン。本当に君は面白い子だね。素直に言えばいいのに」

ウォーレンが困っているのに、スカイは勿論の事、ツールまで無言だ。

（コイツ等全員、海の藻屑になってしまえばいい！）

「ほら、『返して下さい。お願いします』は？」

「いい加減にしろっ、この馬鹿親父っ」

ウォーレンはテーブルを両手で叩いた。どんっと大きな音がした。

「相変わらず、短気だねえ」

はい、と、王が、呆れたように日記帳を差し出した。ウォーレンはそれをひったくるように取る。

「短気は損気っていうでしょ？ そんなんだから意中の子にも逃げられるんだよ」

「まだ、逃げられたと決まった訳じゃ」

「意中の子っていうのは、否定しないんだ？」

（しまった！ 誘導尋問か！）

ウォーレンは慌てたがもう遅い。

しかし、王は、興味なさそうに「そうか」と席を立った。

「呆けてないで、仕事の続きをしなさい。私はこれで失礼するよ。スカイ」

「はっ。ウォーレン殿下、失礼致します」

ウォーレンが呆気にとられる中で、歩く台風ことガートン王は、従者のスカイを連れて、ドアの向こう側に姿を消してしまった。

「何だったんでしょうねえ」

トールの弦きがウォーレンの後ろから聴こえた。

「殿下」

「がー！」

ウォーレンは唸った。いや、吼えた、という方が正しいかもしれない。手元にあった、カップを後ろに向かって投げた。お気に入り、というのは、王が使用した時点で、ウォーレンには過去のことだった。ガチャン、と陶器の碎ける音がした。

「あの、ぼんくら！ 変態！ 昼行灯！ クソっ」

ウォーレンは、分厚い辞書を両手で抱えてその場でぐるぐると回る。勢いをつけて、放り投げた。ばさっ、とページの割れる音がしたが、ウォーレンは気にしなかった。視界の隅に、飛んだ本を避けるトールの姿が映る。

（ちっ、どこまでも、器用なヤツめ）

ウォーレンは、執務室から寝室に続くドアを開け、壁に立てかけであるサーベルを抜く。そのまま寝台に上り、枕の真ん中を切りつけた。ブスっ、と、布の切れる音がして、ふわり、と羽毛が辺りを舞う。

（夏に見る雪景色か）

ウォーレンは、それも悪くないと思った。サーベルを脇に置くと、枕を両手で掴み、左右に力一杯、引っ張った。派手な音を立てて、中身が弾ける。

真夏のスタッピア。乾燥しているので、湿度は低い、気温は高い。三十度を越せば、汗も滲む。

ウォーレンのべたついた肌に、羽根が張り付く。鼻がむず痒くなつてくしゃみが出る。弾みで羽毛のカスを思いつきり吸い込んでしまった。げほげほとウォーレンは咳き込む。

「あー」

気持ちが悪くなったので、ウォーレンはベッドに仰向けに寝転んだ。夏の雪が舞う。ひらひらと降る様子を無感動に眺めた。

「殿下？」

ウォーレンは目だけで声を追う。ツールが呆れたように、戸口に立っていた。

「気は済みましたか？」

沈黙の肯定。なんとなく罰が悪い。ウォーレンが、返事のような気の抜けた声を出すと、侍女を呼ぶ、ベルの音が聴こえた。

ウォーレンは起き上がって、寝室を見渡した。散らばった羽毛が淡雪のように積もっている。ウォーレンは確かに、と一人で頷いた。

（片付けなければ、今夜は眠れないな）

頭の底で思った。

第一章、俺様王子と不機嫌の種、完

第二章、俺様王子とフィーリーの使者 - 1

朝。ウォーレンが目覚めると、周りの空気が慌ただしかった。

「お早うございます、殿下」

侍女がカーテンを開ける。カーテンレールを走る金属が、怒った猫みたいに鳴いた。

真っ白い光が、目を貫く。ウォーレンはあまりの眩しさに目を細めた。

別の侍女が寝巻きの替わりに、いつもの白い服……かとウォーレンが思ったら、白の軍服を着せていった。

「客人か？」

ウォーレンがツールに尋ねる。正装するのは珍しくはない。

「フィーリーから使者が来たんですよ」

「フィーリー？」

ウォーレンはツールの言う地名を飲み込むのに少々時間を要した。

「フィーリー？ あのか？」

確認の為に再度繰り返す。ツールも困惑気味に肯定した。

フィーリーとはスタッピアの西に隣接する大きな森のことで、「聖なる森」とも呼ばれている。一度入ったら二度と生きては出られない等、いろいろな噂があるが、誰の土地でもない、というのが現実だった。スタッピアは一応フィーリーの庇護国として過去に同盟を結んでいたらしいが、それもウォーレンが生まれる前の話だ。

「フィーリーに住人がいたとはな」

「それもそうなんですけど」

トールの戸惑いの原因は他にあるようである。

「陛下とお知り合いのようなんですよね」

「はあ？」

ウォーレンの身支度を終え、侍女が下がる。ウォーレンは、サールを腰に差すと、部屋を出た。

ガートン王は既に謁見室の王座に座っていた。ウォーレンは「失礼します」と声をかけ、階段を上って傍らに立つ。

謁見室の中央には臙脂色えんじの絨毯が敷いてある。それは細長く、入り口から王座までの、道となっている。

使者は、その絨毯の中央に、いた。両手を頭上で組み、肩膝を折る形で静止していた。頭は垂れ、琥珀色の長い髪が顔に覆い被さっている。ウォーレンの位置からでは、表情を伺い知ることは出来なかった。髪の毛の間から、先端の尖った耳が突き出していた。

ウォーレンが位置に着いたのを確認すると、ガートンは頷いた。

「よく来た。フィーリーの客人よ」

ガートンが声を掛ける。使者は拝謁の礼を取ったまま、動かない。

「顔を上げよ」

「はい」

ウォーレンは彼の声の低さに驚いた。そうして彼が男だということに気付く。彫りの深い顔。太く整った柳眉。男らしい顔の造りは、普段、トールという中性的な顔を見慣れているウォーレンには珍しく、まじまじと見つめる。

「久しいね、シーニイ」

「はい、お久し振りでございます、ガートン陛下。お初にお目にかかります、ウォーレン殿下」

「はひ」

間抜けな音が、ウォーレンの喉から漏れた。ウォーレンは自分で自分を呪い殺したくなった。

（落ち着け！　それが将来の王となる者の態度か！）

ウォーレンは自分を叱責した。出てしまったものは仕方ないのである。ウォーレンは改めて使者の方を見た。しかし、シーニイはそんなウォーレンに笑みを向けると、直ぐに王の方に視線をやった。

「二十年振りになりますか」

「もうそんなになるのか。時が経つのは早いねえ」

うんうん、とガートンが感慨深げに頷く。シーニイが言葉を続けた。

「リトベリが不穏な動きを見せています。大量に武器を集め、ごろつきの出入りが激しいのです。侵略と考えれば、リトベリの隣国力ルカロスか、フォーン洋を隔てた我が国フィーリーが危ないのです」

（国、だっ たんだな）

ウォーレンは明るみになった事実^に衝撃を受けた。幼い頃、スタ
ツピアがフリーリーの庇護国だと教えられてから、領土の一部だと思
い込んでいたのである。

「我が国の占術師によれば、リトベリの目的は、我が国フリーリー
であるとのこと。よって、陛下のお力添えを頂きたく、参上した次
第でございます」

第二章、俺様王子とフィーリーの使者 - 2

「カロの占いなら確実だろう。リトベリか。あそこはエルフの存在を否定しているからな」

ガートン王が考え込むように、右手で顎を触った。

（そうなのか）

ウォーレンが初めて耳にした情報。ウォーレンだって、こうして使者を目の当たりにしなければ、エルフの存在を信じることはなかっただろう。使者が来た、と報告を受けるまで、フィーリーの存在すら忘れていたのだから。

広大な土地。その敷地は大国スタッピアの四倍を軽く越す。支配者のいない未知の森となれば、リトベリが武器を集める理由も納得がいく。

「我が君は、森を離れることが出来ない身ですので、代わりに私が参りました。この度は、再び同盟の調印を結んで頂ければ、と思います」

「うむ、そうだな」

ガートン王は、うんと頷くと、こう言った。

「ここにいるウォーレンをそちらへ行かせよう。一ヶ月ほどあればいいか。身分は第一王子だから、不足はないだろう」

「はい」

「はい？」

シーニイがウォーレンに微笑む。ウォーレンは間抜けな声を出した。そうして焦ったように抗議した。

「ちょっと待って下さい、陛下。私には仕事があります」

「一ヶ月ぐらい大丈夫だろう？ 帰ってきたとき、ちょおつと大変かもしれないけど、優秀なお前ならちゃちゃつと済ませられるよね」
「それはそうですが」

ぷつと誰かが噴出して、ウォーレンは声のした方を見下ろす。そして目を二三度瞬かせた。ウォーレンの見間違いでなければ、使者が、フィーリーからの使者が、お腹を抱えて笑い転げていた。

「あつはつはつ。あー苦しい。イヤだわーもう、ガートン様ってば変わってないのねえ」

「シーニイも変わってないな」
「おかげさまで。ウォーレン王子もすっかり立派になっちゃって。ティアアラ様似で良かったわねえ」

オネエ言葉が、シーニイの口からぼんぼん飛び出る。ウォーレンは、父親と使者を交互に見つめた。

「ん？ それは嫌味？」

「あらあ、ガートン様ってば、おつむが働くようになんたんじゃない」

ウォーレンの目の前をブリザードが通りすぎる。

（なんだか寒いぞ。この二人、仲悪いのか？）

ウォーレンが思案する中で、ガートンがのほほんと告げる。

「まあ、いいや。シーニイ、ウォーレンをよろしく頼む」
「言われなくてもわかってるわよ。アタシに任せて頂戴」
「ウォーレン」

ガートン王がゆっくりとした動作で、振り返る。

「シーニイがついているから、大掛かりな警備はいらないね。トールだけで十分だよ」

「は？」

「なんだい。ウォーレン。もしかして、怖いの？」

「まさか」

につこり。笑ってみせたが、ウォーレンの内心は穏やかではなかった。未開の地。エルフ。未消化な単語が、ウォーレンの不安を煽り立てる。

「その笑顔は虚勢を張るときの癖だね、ウォーレン。大丈夫。シーニイの腕だけは信用していい」

「腕だけは、つて何よ」

「その通りの意味だ」

ガートンとシーニイの会話の外で、ウォーレンは悔しさに悶えていた。ウォーレンの不安をずばりと言い当てた父親。

（こういうところは親なんだよな）

よくみているというかなんというか。

（結局、この人には敵わないんだ）

それを再認識させられたようで。

だから、母親がこの父に惹かれた理由もわかるのだ。多くの妾妃を持つ父を、死ぬ間際まで愛した人。ティアラ・リラ・スタツピア。後宮を纏めたという、皇后がウォーレンの母親だ。ウォーレンを産んだときに亡くなっているの、ウォーレンが知っているのは話の中の母だけなのだが。

「よろしくねえ。ウォーレン様」

背中を悪寒が走る。シーニイの目付きが、品定めをしているように鋭い。ウォーレンは身震いした。

第二章、俺様王子とフィーリーの使者 - 3

執務室は祭事の時のようだった。

五日あれば十分だろう、と出立までの猶予を与えられ、ウォーレンは忙しい日々をさらに忙しく過ごしていた。部屋にはいつもの三倍はあろうかという書類の山、山、山。それは、ウォーレンがスタップピアの首都ミンスクを治めている事と関係している。

ウォーレンはふと手を休めて、軽く伸びをした。

「殿下、手が止まっています」

「ああ」

トールは束の間の休息も許さない。

（鬼！）

泣き言は、頭では思っても、口では言わないウォーレンである。書類にサインしながら、トールが頼んだ、ミントティを飲む。

（ああ、生きてる）

毎日同じことの繰り返しだと、生きていることを忘れそうになる。些細なことに感動しなくなり、たわいもないことに目もいなくなる。

だから、トールは従者として、とても有能なのだ。現実から引き離されているウォーレンの魂を、こうして引き戻す手段を与えて、忘れている事実を思い出させてくれるから。

（それにしても不味いな）

それと、ウォーレンのミントティとの相性の悪さは別かもしれないが。

そのとき執務室の扉がノックされた。ウォーレンはそちらに目をやる。

トールがドアを開けた。

「おや、トウズラ様」

「こんにちは、トール」

おずおずとトールの背後から姿を現したのは、ウォーレンの腹違いの妹、第十位王位継承権を持つ王女、トウズラだった。

滅多に会うことのない妹の訪問に、ウォーレンは、目を瞬かせた。トウズラはスカイと同じ故郷の母親を持つ。

腰まである長い髪は黒のインクを垂らしたように漆黒だった。肌の色は父親似か乳白色で、触ったら柔らかそうだ。

（って何を考えているんだ、俺は）

ウォーレンはトウズラを見つめた。しかしトウズラは髪と同じ闇色をした瞳をさ迷わせたまま視線を合わせようとしない。ウォーレンにとって腹立たしいことに（ウォーレンには何故かわからなかったが）、トールのそばで、立ち止まったまま、ぎゅっと両手を握り締め、俯いている。

「どうした、トウズラ」

ウォーレンが思ったよりも優しい声が喉を通り過ぎる。

途端に、トウズラの表情が、陽が差し込んだように明るくなった。

「ウォーレンお兄様、しばらくの間、この国を離れるって聞きました。トウズラは、お兄様の御武運、祈ってます」

その言葉が、枯れかけた草木に与えた水のように、ウォーレンの心に染み渡り潤していく。ウォーレンは、ペン立てにペンを戻すと、立ち上がり、トウズラの方へ歩み寄る。彼女の前で屈みこみ、ぽんと頭を撫でた。

「ありがとう」

トウズラお頼が紅潮する。腹違いではあるが、数多くの弟、妹がいる中で、トウズラはウォーレンに打算を持たない唯一の妹だ。

神の愛し子。トウズラは邪念を持たない、スタツピアの聖なる巫女として生まれてきた。

今は先代の巫女の代わりに（巫女となるのは成人するまで）、王城の北の塔で、修行をしつつ、神降ろしなどの業務をこなしている。他の弟妹には厳しい一面を見せるウォーレンも、この妹だけには心を開いていた。七歳年下の可愛い妹だった。

「行って、らっしやい、ませ。ウォーレンお兄様」

たどたどしい言葉さえも愛おしい。ウォーレンは心から微笑むと、トウズラ付きの侍女を呼び、忙しくて滅多に会いに行けない妹を見送った。

第二章、俺様王子とフィーリーの使者 - 4

五日はあつという間に過ぎた。国の北よりにある首都ミンスクから西の国境に接しているフィーリーの森の入り口まで、早馬で二日かかるという。

早朝、城門の外から、住み慣れた城壁の向こうを思い、ウォーレンは目頭が熱くなった。

フィーリーは、未知の土地だ。何があるかわからない。もしかしたら、二度と帰れないかもしれない――。

マイナスの考えが、ウォーレンの感情を支配する。

それに追い打ちをかけるように、ウォーレンの父親であるガートン王が「達者でな」と抱擁したのだ。国を離れるのは、たかだか一か月であるというのに。あの王が！

「……殿下」

気遣うようなトールの声。

思いを振り切るように、ウォーレンは姿勢を正す。栗毛色の馬は、ウォーレンの愛馬だ。気性の穏やかな雄で、今年で二歳とまだ若い。シーニイが魔法を使ったらしく、目立ち難い服装というわけでもなかったのだが、道中、民に声をかけられることもなく、三人は街中をゆつくりと通過した。一日目は、首都ミンスクの外れの村で宿を取った。

翌日、整備された街道に出ると、ウォーレンたちは休憩もそこそこに、一気に馬を走らせた。そのおかげか、四日目の日の沈む頃には、フィーリーとの国境まで早馬であと一日という距離の村に入ることができた。

空が茜色に染まっている。ウォーレンもトールも、普段、こんな長時間、乗馬することはない。身体中が痛い。ウォーレンは入浴時

に悲鳴を上げそうになった。節々が固まっている。さらに臀部が擦れて湯に沁みた。

宿の寝具も、簡素なものだった。疲れ切った身体には少々こたえたが、それでも、ぐっすり寝入ってしまった。

五日目になると、馬に乗るのも、躊躇われた。けれど、駄々をこねるわけにもいかず、ウォーレンは、馬で駆けた。

スタツピアの端、フィーリーとの国境の近く、ウォーレンたちは木陰で休んでいた。辺りは、木が生い茂って、鬱蒼としており、空気が心なしに澄んでいるように思えた。

ウォーレンは、愛馬から降り、地面に足をつけていることに感動すら覚えた。

シーニイが、火を起こし、フィーリーの特産だというお茶を淹れてくれた。疲れを癒す効能があるという。

（苦いな）

「苦い？ 顔に出てるわよ、ウォーレン様」

くすくすとシーニイが笑った。トールは、というと、涼しい顔をしている。何だか負けたような気がして、むむ、っと、ウォーレンは唸った。

唐突に、シーニイが、焚火に水をかけた。トールも厳しい顔をして、剣の柄に手をかけている。

殺気が漂っている。ウォーレンは、眉間に力を入れて、立ち上がる。三人は、馬と荷物から離れ、見通しの利く街道に出る。

ウォーレンは、サーベルを鞘から抜き、構えた。拔身の刀が、オレンジの光を反射する。

「馬と荷物を置いていけ。そうすれば命だけは助けてやろう」

現れたのは、烏を肩に乗せた、男たち。ボサボサの烏羽色を頭の頂で纏めている、小柄な一族だ。

「キールか」

ウォーレンは呟いた。

キールと呼ばれる小柄な一族。背丈はスタツピア王国国民平均の半分ほどしかなく、視力が恐ろしく良くて、動きが素早いのが特徴だ。

ウォーレンの父親・ガートン王が手を焼いている一族でもある。キールは中央帝国・サフランの国民でもあるが、一族は各国に点在しており、迫害を受けてきた歴史がある。

スタツピアでは、キールの入国を認めておらず、国内にいるキールは全て不法入国者だ。密輸入出の裏には必ず彼らの存在があるといっても過言ではない。ゆえに、職に就くのが困難で、一部がこうして盗みを働いたり、商人を襲ったりと、被害は後を絶たない。

もちろん、まっとうに生活している者もいる。しかし彼らは、貧しかった。

シーニイの魔法がかかっている為、ウォーレン一行はただの行商人に見えているはずだった。

男たちは、得物を持ったまま、じりじりと近づいてくる。

「やあねえ」

シーニイが漏らした。

次の瞬間、ピシリ、と何かが割れる音がして、シーニイに飛び掛かった男が低く呻く。

第二章、俺様王子とフィーリーの使者 - 5

頭を両手で押さえて、口から泡を吹き、地面に倒れた。手足が痙攣し、白目を向いている。内出血が酷いのか、顔がみるみるうちに赤黒くなった。

ウォーレンは、何が起こったのか、わからなかった。シーニは腕を一回、犬を追い払うように、外側へ軽く振っただけだ。

周りを囲んだ男たちのほとんどは、その様子に悲鳴を上げると、蜘蛛の子を散らすように林の中に消えていった。

倒れた男が、吐いた血の飛沫が、辺りを生臭く彩っていた。

「汚れちゃったわね。移動しましょうか。……ウォーレン様？」
「何をした？」

ウォーレンは、がたがたと震えていた。棒のように突っ立って、シーニを見つめる。指先すら動かせず、嫌な汗が、ウォーレンの背を伝う。

「ウォーレン様、魔法を見るのは初めて？」
「今のが魔法か。人を物のように殺すそれが」

激昂して、ウォーレンは叫んだ。今のウォーレンを支配しているのは、怒りと恐怖だった。シーニが嫌そうな顔をする。そうして呆れたように重く息を吐いた。

「ウォーレン様、綺麗事じゃ国の政治はやっていけないわよ。剣を持っているんだもの。貴方も人を斬った事がありでしょう？ それとも、その剣はお飾りだっていうのかしら。将来、一国の王になるという者が、とんだお笑い種^{ぐさ}ね」

ぐつと、言葉に詰まるウォーレンである。シーニイの言っていることは、正論すぎて、反論できない。視線を彷徨わせ、ウォーレンは言いよどむ。

「恐れながら申し上げます、シーニイ様。殿下は人間を殺したことがございません。剣を使ったことはありませんが、全て峰打ちでございます」

「ではばるな、トール！」

「そう言っていていられる場合ではないですよ、殿下。ガートン陛下は太平の世をお造りになられた。今のスタツピアは非常に安定しています」

「そんなことは解っている」

「頭で解つていても意味はありません。戦になれば、峰打ちでは生き残れませんよ」

「それも解っている」

「とんだ甘ちゃんに育て上げたわね、ガートン様は。でも、ちゃんと、まともな従者をつけている辺り、自覚があるのかしら」

シーニイが視線をずらしたので、その先をウォーレンも追う。すると、先程の残り、キールの死骸を踏み付けているトールの姿が目に入った。キールの一人に突き刺した剣を抜くと、長い白い髪に血飛沫が飛び、それが幾重にも重なって染みを作っている。

ウォーレンの方を向いて、刃を布で拭くトールの顔は無表情で、ぞつと背筋が寒くなった。

「トール」

彼の名をウォーレンが呼ぶと、トールは、人を刺したとは思えない程涼しげな顔で「殿下」と口にしほんのり笑った。

ウォーレンは消化不良な気分で下唇を噛んだ。甘い鉄の臭いが口内に広がる。

「これが現実よ、ウォーレン様。目を逸らさないで、ちゃんと向き合って。それが王になる者の定め」

シーニイの言葉に、苦いものを覚える。トールは平然としている。いつものように。執務室に居る時と同じように。状況が変わっても。

「わかった」

胸が苦しいのは呼吸が浅いからだ。

（俺は今まで何を見てきた？）

トールとともに各国を渡り歩いた少年時代。

（いつからだ？）

ウォーレンは問う。自分自身に。

トールはスタツピアの大將軍アスタロトの七番目の子供だ。詳細は知らないが、あそこは父親の跡目争いが起こり、トールが生き残ったという話を、昔ガートン王から聞いた。

（子供だったのは、俺だけだったのか）

できれば一生気付きたくはなかった。

けれどこれも皆に認められる王に、父親であるガートン王に近づく為の一步だ。

（いつまでも、子供のままじゃいられない、か）

前に進まなくてはならない。

ウォーレンだって剣術の稽古は受けている。気配だって読める。

「殿下！」

トールの叫び声。シーニは動かない。

右手から来た殺気にウォーレンは抜刀した。峰打ちではなく、刃を相手に向けて。

ザシュ、つと音がして、水分が飛んで来た。

これが重み。人の命を奪った代償。

「やればできるじゃない」

浅く速い呼吸をしながら、ウォーレンはゆっくりと振り返った。

第二章、俺様王子とフィーリーの使者 - 6

ざっくりと切れた胸の傷。視界を染める鮮やかな紅。キールの男が仰向けに倒れていた。

夕暮れ時の国境付近。もう少し先の分岐点を西に行けばフィーリーに、北に行けば、サフランに着く。

日差しが眩しい。ウォーレンには、自分のつけた傷がよく見えた。ウォーレンも、他の二人も、傷一つ負っていない。

「片付いたわね。進みましょう」

興奮している馬を宥め、シーニイが先頭に行く。ウォーレンはトールとともに後に続いた。

「殿下」

ウォーレンの半歩後ろから、トールが静かに口を開いた。

「何だ？」

「私を軽蔑なさいますか？ 私はこの手で兄弟を殺めました」

シーニイは聞こえないのか（きっと聞こえない振りをしているのだろう）、前を向いたまま、馬を歩かせている。道は凹凸が激しくなり、馬を走らせることは難しい。

「それでも、トール、お前は俺の側に居てくれるんだろう？ 今日驚きはしたが、噂は聞いていたからな。逃げることは許さない」

(許されない。この俺も)

ウォーレンの言葉に、トールは顔を綻ばせた。馬上で片手を放し、胸の上に当て、首を垂れる。

「この命尽きるまで、忠誠を誓います」

「今言うことか？」

「そうですねえ。今、言いたくなっただんです」

普段、のらりくらりとウォーレンの質問をかわしているトールの、心からの言葉。

ウォーレンは照れながら笑うと「勝手にしろ」と、告げた。

「道を外れるわよ」

会話は筒抜けだったのだろう。聞いていたとしか思えないタイミングの良さで、シーニイの足が止まり、彼はウォーレンたちを振り返った。

「そっちは？」

「ただの獣道よ。ただし」

につこり笑顔で、シーニイはウォーレンたちを見た。

「二十年前の、エルフ専用の、ね」

ウォーレンが道の先に顔を向けると、林の一部分が、虹色の楕円で切り取られている。

その向こうには、木の根や岩で、更に凸凹とした「道」が続いて

いた。

「馬で進むのか？」

「いやあねえ、ウォーレン様ったら。アタシー人ならそれも可能だけれど、お二人には無理よ、無理。徒歩に決まってるじゃない」

「フリーリーまでは馬であと一日かかるんだろう」

「それは表向きの話ね。言っただしょう？ ウォーレン様。こっちはエルフ専用の道だと。もう少し中に入れば、もう安心よ。そうしたら今夜はゆっくり休みましょう。流石にアタシもくたただわ」

馬に慣れないウォーレンたちに代わって、より多くの時間、見張り番を買ってでてくれたシーニイ。日は既に沈み、夜の帳が下りている。街道は闇に包まれ、視界が危ういが、楕円の向こうは不思議な光に包まれている。

「灯り虫よ」

ぼんやりと光っては消え、光っては消える、丸い灯り。

急いで、ウォーレンは馬を下り、恐る恐る虹色の輪を通り抜けた。

明るい笑い声が響く。軽やかで鈴の音のようなそれは、ウォーレンの思考を奪った。

——この声を知っている。

ウォーレンは目を開けようと試みた。しかしどんなに力を込めようとも、瞼は鉛のように重い。

（君は、誰だ？）

脳裏に映るのは、夢の少女。濃い緑色の髪、茶色の優しい眼差し、線の細い身体。

眩しい程の笑顔。

ふと、目が覚めた。

太い幹、絡んだ根。ちょうどヒト一人収まるくらいの窪みで、ウォーレンは眠っていたらしい。

「よく休まれた？」

ウォーレンの頭上から声が掛かる。短い掛け声とともに、シーニが枝からウォーレンの側へと飛び降りた。

ウォーレンは虚無感を覚えて、シーニに尋ねた。

「トールはどこだ？」

「あの、白髪君なら、その根元にいるわよ」

ウォーレンのいる窪みの更に下、突き出した岩に寄り掛かるようにして眠っている。女のように滑らかな肌を、色素の薄い髪が覆っていて、彼の表情は窺がえない。

第二章、俺様王子とフィーリーの使者・7

「とても疲れているのね。普段のアナタのお守りと、夜もあまり寝てなかったみたいだし」

言われてみれば、とウォーレンは思う。トールの眠っているところを見た事がない。いや、あるにはあるのだが、彼は視線を感じるのか、直ぐに目を覚ましてしまうのだ。

それを当たり前のように感じていたウォーレンだったが。

「まあ、主人の前で熟睡する従者は言語道断だけれどね」

（借りは作りたくなかったんだが）

先程のことといい、今気づかされたことといい、まだまだウォーレンが気付いていないだけで、トールはたくさんの中から守ってくれているのかもしれない。

ウォーレンたちの視線に気づいたのか、トールが身じろぎした。ゆっくりと顔を上げ、ウォーレンを見て、慌てたように立ち上がった。トールのそんな立ち振る舞いは、普段滅多に見られない。

「申し訳ありません、殿下。いつの間にか深く眠ってしまったようです。いつもはこのようなことはないのですが、この不思議な空間のせいでしょうか」

不思議な空間。トールの言葉に、ウォーレンは納得する。

ウォーレンたちが休息を取っていたのは、エルフの道に入ってから、半刻程歩いた場所で、さらにシーニイが結界を張った中だ。

結界を張る必要性についてウォーレンが尋ねたところ、シーニイ

は「安眠のおまじないよ」と淑女のようにころころと笑ってみせたのだ。

結界が功を奏したのか、ウォーレンはぐっすりと眠りに引き込まれたのを思い出す。

「悪いトコロだけじゃないでしょう?」

シーニイがウォーレンの隣で微笑んだ。

「魔法にもいい使い方はたくさんあるのよ」

「何か食べる?」と訊かれて、ウォーレンはお腹の空腹感を自覚する。

だが、ここで食べるのはウォーレンのプライドが許さない気持ちがあった。しかし身体は正直だった。きゆるきゆるきゆると確かな音が、ウォーレンのお腹から鳴る。ウォーレンは穴を掘って埋まりたくなった。

「戴きましよう、殿下」

トールの言葉に、ウォーレンはしぶしぶながら頷く。このまま断つても、意味のないことをウォーレンは自覚した。シーニイを見れば、やれやれ手のかかるヒトねえ、と声が聞こえてきそうなくらい、苦笑いを浮かべていた。

干した米を水で戻し、シーニイが採ってきた色鮮やかな茸や葉を千切り、一緒に鍋に入れた。蓋をし、煮込む。

米はスタッピアでは滅多にお目にかかれない。稲国サフランと小

麦国スタツピアは仲が悪く、それは米の流通にも反映されていた。

スタツピアの南方で栽培される小麦と比べて、米は二倍から三倍と値が張る。到底庶民が口にできるものではなかった。しかし米は栄養価が高く、ウォーレンは民が食べられるように、スタツピアでの稲作農業に多くの投資をしていた。しかし、歴史的にも小麦に慣れ親しんだ国民は、なかなか手強い。スタツピアの気候から、雨の少ない季節もあるので、稲作には降水量が足りないと、農業組合代表がぼやいていた記憶も、ウォーレンにはあった。

「もう、いいかしらね」

シーニイが鍋の蓋を取る。ほかほかと湯気を立てる鍋は、シヨツキングピンクに変化していた。

「これを、食べるのか……？」

ウォーレンの背中を冷や汗が走る。ごくりと生唾を飲み込んだのは、スープの色に反して、茸独特の美味しそうな匂いが鼻をくすぐったからだ。

「あら、フォーリンの茸は、疲れの原因、乳酸を吸収して体外にだしてくれるのよ」

身体にいいのよお、とシーニイはいそいそと、茶碗に雑炊をよそりだした。

匂いはいい。空腹を主張する身体が憎らしい。しかし色はシヨツキングピンク。

（うちの親父の頭の中身みたいだな）

心の中で、納得するウォーレンである。

トールも隣で、茶碗を手に固まっていた。しかし、ウォーレンと視線が絡むと、一度頷いて、意を決したように、匙で中身を掬う。

まるで、戦争の前線にいるかのような緊張感。

トールは無言で咀嚼^{そしゃく}し、飲み込んだ。「トール？」ウォーレンが問うと「美味しいです」。シイタケに近い味がしますよ」

「あらやだ、毒なんて入ってないわよ、ウォーレン様。冷めちゃうわよ?」

シーニイが可笑しそうに笑った。ウォーレンは匙の半分を口に含んだ。熱いものが、口内を満たす。何度か嚙んでいるうちに、シイタケに似た、茸の風味が、鼻の奥を通り抜けた。

第二章、俺様王子とフィーリーの使者 - 8

「うまいな」

ぼそつとウォーレンは呟いた。粥をかきこみ、スープまで飲み干す。熱が伝導する。身体がほてる。ウォーレンの額から、汗が伝って落ちる。

大きく息を吐き出して、空になった茶碗に目をやった。シーニが無言で手を差し出す。

二杯目もウォーレンは難なく平らげた。

食後、用を足して戻ってくると、トールだけが茶を飲んでいた。

「シーニは」

「鍋を洗いに行きましたよ。小川があるみたいですね」

耳を澄ませば、川のせせらぎが微かに聞こえてくる。

「殿下の分です」

差し出されたのはトールが飲んでいるものと同じものだ。透明な琥珀色の液体は、キールに襲われる前に、シーニが淹れたものと同じ匂いがした。

「殿下」？

気遣わしげなトールの声。

「お前、それ、苦くないのか」

「お子様には苦いかもしれません」。あ、殿下はもうすぐ成人なされますし、大丈夫ですよ〜」

にこにここと、元気いっぱい笑顔が返ってきた。

ウォーレンはがくりとうなだれ、己の変化に気付いた。心なしか身体が軽い気がする。

（さっきのショッキングピンク雑炊のおかげか？）

だとしたら、恐ろしい。この恐ろしさは、得体の知れないものに対する恐怖だ。

自分たちは、本当に未知の世界に足を踏み入れたのだ、とウォーレンは改めて思った。

「お待ちせ〜」

頭上から声が降ってくる。目線を上げると、シーニイが器用に枝から枝へ飛び移って、終いに、着地した。

「お腹も膨れたし、行きましよう！」

馬を手近な木に繋ぎ、厚手のマントを降ろして徒歩で行く。途中で小川に差し掛かった時、急な斜面でウォーレンは足を滑らせた。咄嗟に長い多年草の葉を掴む。

太陽は南中を過ぎ、標高が高いせいかわいよりも些か肌寒い。空気は心なしか澄み、小鳥の囀りがよく響く。木々は歌い、木の根は、まるで生きているかのように、踊る。

山道を数刻進んだところで、一本の太くて大きなブナの木が現れた。その中央にはヒト一人入れるくらい大きな洞がある。

シーニイが洞の前で立ち止まって、ウォーレンたちを振り返った。

「ここよ」

「この洞の向こうが、フィーリーなの」

先に行つて、と言われて、ウォーレンは、恐る恐る中を覗き込む。どこまでも続いていそうな漆黒の闇がウォーレンの瞳に映った。

まず、トールが闇の向こうに消える。次はウォーレンの番だ。

腰を屈めて、洞の淵に足を乗せる。そこから目を瞑つて、想いきり飛び込んだ。

きらきらと白銀に光る一面の雪。さくつという音と共に、ウォーレンは着地した。

林の中の開けた場所。目の前に、コバルトブルーの湖が広がっている。ウォーレンが後ろを見ると、シーニイが大きな木の洞から身体を出すところだった。こちら側の木も立派なブナだった。

「ようこそ、フィーリーへ」

シーニイが微笑む。そのとき、濃緑の波が、ウォーレンの視界を移動した。

「ウォーレン！」

甲高い、少女特有の声。ウォーレンの思考が、パリンと碎けた。

第二章、俺様王子とフィーリーの使者、完

第三章、俺様王子と光の君 - 1

「待ちわびたぞ、ウォーレン！ 妾はお主に会いたかった」

少女の背丈は、一五〇センチに近いトウズラと同じくらいだろうか。頭がウォーレンの胸の辺りで動いている。

夏の日差しに映える濃い緑色の髪は、さらさらと音がしそうだ。少女の動きに合わせて左右に踊る。

「メイヴィット様、落ち着いて下さいねえ。ホラ、王子様、固まっちゃってるから」

「む。それはいけない。ウォーレン。失礼した。向こうでゆっくりと話そうぞ」

「何故」

ウォーレンは、衝撃で固まっていた。ツールとシーニイが何か言っている。言葉は脳に飛び込んでくる。ウォーレンはそれを理解することはできる。しかし、脳の処理は追いつかない。まどろっこしかった。ウォーレンは、メイヴィットの両肩を鷲掴みにして、まじまじと見つめた。

「君がどうしてここにいる？」

ようやく言葉を絞り出した。

濃緑の長い髪。穏やかな茶色の双眸は悪戯に光る。華奢な身体。抜けるように透明な肌色。黄緑色のドレスは、身体に密着するような型だ。

「どういことですか、殿下」

ツールが、口を挟む。

「^{くだん}夢の女性だ」

呆けたようなウォーレンの声に、メイヴィットの笑い声が響く。

「まあまあ、立ち話も良いけど、フィーリーには美味しい紅茶もあるのよ、ウォーレン様。ゆっくり座りながらでもいいでしょう?」

シーニイがメイヴィットをウォーレンから引き離す。

動けないウォーレンと、後ろに控えているツールに向かって、メイヴィットが一礼する。

「ようこそ、フィーリーへ。妾がフィーリーの主、メイヴィットじや」

ウォーレンの思考が停止した。

フィーリーは光に満ちていた。白銀に覆われながらも、緑を失うことなく、暖かだった。

「溶けない雪、か」

「雪は溶けるもので、ウォーレン」

何を当たり前のことを、とい風にメイヴィットが告げる。

フィーリー独特の花の紅茶は、薔薇の花びらを煎じたものだ。濃厚な香りがウォーレンの鼻腔をすり抜ける。

「亡き母が言っておった。フィーリーのものは熱に強いだけで、溶けない雪はないのだと。実際、フィーリーの外で溶けるところを見ておるしな」

フィーリーに城はなく、木々で作られた空間が個々の部屋の役割をしている。

特別に広い空間。太い幹に、枝が折り重なるように方々へ伸びて、四方を囲っている。天井は高く、緑の葉の向こうで白光が輝き、燦々とした光が地面に降り注ぐ。

檜の木でできたがっしりとしたテーブルを囲んで、ウォーレンは、玉座とも呼ぶべき位置に座っている少女を観察する。

濃緑の長い髪はみずみずしい夏の葉を絞ったかのように。触れてみたくなった。

ウォーレンの手が伸びる。メイヴィットと視線が合った。彼女はもぐもぐとお菓子を咀嚼している。ウォーレンは手を引っ込めた。

「どうした、ウォーレン。菓子か？」

「違いますわ、メイヴィット様。ウォーレン様ったら、メイヴィット様の美しさにやられちゃったんですよ。ほほほ、流石は我が君だわあ」

シーニイが、嬉しそうに、ビسケット菓子を口に放り込んだ。

ウォーレンは、シーニイを睨む。

（言わなくてもいいものを）

「ウォーレン殿下は女性に免疫がありませんからね。落とすならいまずよ、メイヴィット様」

トールまでもが調子に乗って、楽しそうだ。

「トール」

「何ですか、殿下」

「お前、いつから俺の敵に回ったんだ」

「嫌ですね。愛の鞭という言葉を知らないんですか」

にこにこ笑いながら、トールは艶のあるスポンジケーキみたいな焼き菓子をつまむ。

「これおいしいですね。バターの風味がしっかりします」

ウォーレンは寒気がして視線を空にやった。本日は快晴なり。澄み切った青空がウォーレンの視界に入る。

第三章、俺様王子と光の君 - 2

違和感を感じて合い向かいに座るシーニイの隣を見た。さっきからずっと感じていたのだ。悪意の籠った視線を。気付かない振りをしていたのだが、向こうは殺気を隠そうともしない。トールは呑気にシーニイと談笑している。ウォーレンは視線を向けた。

プラチナブロンド。白に近い金色の髪を後ろで一つに束ねた、青年。シーニイと違って、眉は薄い。彫は深いが、どちらかという顔つきはスタツピア人に近い。つまり、エルフより人間に近いのだ。視線がウォーレンを捕らえた。ウォーレンは眉根を寄せた。

（何か失礼なことしたか？）

ウォーレンは己を振り返る。青年はスタツピアで言うところの軍の長だという。瘦身からは考えられないが、エルフは魔法を使う。人間とは勝手が違うのだと、ウォーレンは話を聞いた。

（確か、ロキーナと言ったか）

ウォーレンが負けじと睨み返すと、怯んだように視線を逸らされた。知ってか知らずか、シーニイがウォーレンに笑いかけた。

「ねえ、ウォーレン様。フィーリーは美しいでしょう？ 世界一、緑の豊かな土地なのよお」

「ああ、そうだな。メイヴィット殿の髪の色も鮮やかだが、フィーリーは自然に溢れている。スタツピアでは考えられないな」

暑い暑いスタツピアの夏。フィーリーほどまでは言わないが、これの半分だけでも緑があったなら、どんなに涼しいか。ウォーレ

ンは思案した。町の開拓で、スタツピアの森林は削られ、木々のない土手や、山は、大水が出ると、土砂崩れや大洪水を起こす原因ともなっている。

「当たり前だ。お前たち人間は緑を何だと思っている？ 自然は我々エルフの友だ。お前たちには欠如しているものだろう」

ロキーナの毒気のある口調に、ウォーレンは不快を露わにした。

「ロキーナ殿。私に、言いたいことがあるなら、黙ってないで、発言してもらいたい。我が国スタツピアはフィーリーと協定を結ぶんだ。齟齬や障壁があつてはならないからな」

（気に入らない）

ウォーレンはそう思いつつも、表面は穏やかに対応する。ロキーナが、ふんっ、と鼻を鳴らした。

「別に協定など結ばなくても、我らだけで何とかできるわ。お前らのような蛮族と手を組むと考えただけでも寒気がする」

「ちよつと、ロキーナ！」

シーニイの窘めに、ロキーナは自嘲した。

「何ですか、シーニイ様。隠居ジジイは黙って下さい」

（隠居の身だったのか）

ウォーレンはロキーナの物言いに、腹を立てる、を、通り越して呆れてしまった。シーニイの方に視線を戻すと、ウォーレンはロキ

ーナを無視して言葉をかける。

「シーニイ殿は今年で幾つになる？」

「やっと、アタシの名前を呼んでくれたわねえ」

シナを作って、シーニイが微笑んだ。

どうやらしてはイケナイ質問だったようだ。

（態とか。態となんだな）

背中をつつと撫でられたみたいに、寒気が走る。ウォーレンは自分の腕をまくってみた。

鳥肌が立っていた。

「ウォーレン様ったら、道中一度も名前を呼んでくれないんですもの。アタシ寂しかった」

ウィンクを決めるシーニイ。ウォーレンの全身が泡立った。

「シーニイ様。そこまでにして下さい。ただでさえ、殿下は、シーニイ様にあつてから多大な衝撃を受けているんです。これ以上は殿下の許容量オーバーしてしまいますよー」

トールの慌てたような声が横から聞こえた。
フォローが胸に染み入るウォーレンである。

はっ、と馬鹿にしたような笑い声が起こり、ウォーレンを含め全員の視線が向いた。ロキーナが、ウォーレンを真っ直ぐに見つめていた。

「軟弱な奴だな。おっと、失礼」

「お前っ」

ウォーレンが、勢いよく立ち上がった時である。

「ロキーナ、謝るのじゃ」

静かな音が、場の雰囲気を砕いた。ロキーナの眼差しが若干穏やかになる。

「何故ですか、メイヴィット様。俺は真実を告げたままですよ」

「お主は未知の者に会ったことはなかるう。ウォーレンにとって妾たちは今日知った友じゃ。妾たちは人間を知っておるが、ウォーレンたちはエルフを知らなんだ。驚くのも無理はなかるうて」

「俺は、闘います」

「未知の存在とか？ 己とか？」

メイヴィットの質問に、ロキーナは言葉に詰まったようだった。一瞬、沈黙が降りる。

「両方と、闘います」

「相手が敵じゃなかったらどうするのじゃ？ 敵だとしても敵わないかもしれない。逃げるのが得策かもしれないぞ？」

「メイヴィット様！ 俺を信用されていないのですか！」

ロキーナが立ち上がって主張した。ウォーレンがメイヴィットを見ると、彼女の視線は、心外だともいうように、ロキーナを捕らえている。凧。まるで海が眠っているような、静かで穏やかな眼差しだった。

「勿論、妾は、我らがエルフ軍総隊長を信用しておる。妾が言った

のは、可能性の話じゃ。普段冷静なお主だからこそじゃ。今も神経を尖らせておろう。空気が痛いぞ」

メイヴィットは、言葉を区切ると、ウォーレンの方に顔を向けた。ウォーレンは、反射的に、にっこり微笑を浮かべる。

第三章、俺様王子と光の君 - 3

「ウォーレン。失礼した。ロキーナは少々過保護での。今回のことで、フィーリーが人間に侵略されることを恐れているのじゃ。妾に免じて許してやってくれ」

ウォーレンは、目の前のエルフの少女（少なくとも外見上は）を心新たに見直した。

「惚れ直しちゃった？ ウォーレン様」

シーニイの横やりに、ウォーレンは低く唸った。威嚇。しかし、シーニイは気にも留めない様子で、続ける。

「まあ、第一印象がアレじゃあ、侮るわよね。ああ、気になさらないで、ウォーレン様。ただのアタシの独り言よん」

弾んだような口調だが「我が君を見縊^{くひ}るな」という威圧が、シーニイから感じられた。ウォーレンは、ぶるっと身体を震わせた。別の意味で背筋が寒くなった。

ウォーレンとトールが三日間、滞在する場所として与えられた部屋は、食事を取った広い空間から見える場所にあった。

群生している植物は、部屋の役割ごとに違うらしい。スタッピアという「客間」であるという空間に案内されたウォーレンは、足元の感触が、ざらざらしたものから、綿のようなふわふわしたものを踏んでいることに気付いた。柔らかく熱を帯びて、足元から伝わる

温もりは、眠気を誘う。

「ウォーレン。縄の揺り籠は見た事があるか？」

木と木の狭間に、細かい網目模様の縄が張られているのを見て「いや」と否定する。

「妾たちエルフは、こうやって眠る」

言いながらメイヴィットは網に身を投じた。衝撃で、縄がゆらゆらと揺れる。

メイヴィットが気持ち良さそうに目を細めた。

「落ちないのか？」

「しっかり結んであるからの。安心して大丈夫じゃぞ。さて、明日はフィーリーを案内しよう」

メイヴィットが小さい鈴が鳴るように忍び笑いを漏らした。

「案内、よろしく頼む、メイヴィット殿」

「勿論じゃ。ではお二方、ゆっくり休まれたまえ。妾はこれで失礼する」

メイヴィットが微笑みを残して去って行く。

ウォーレンは、空になった、網縄に腰かけた。

「まさしく揺り籠だな」

「ええ、異国に来た気分になりました」

トールも疲れているのか、妙に大人しい話し方だった。いつもの、

ウォーレンをおちよくる調子ではない。

「どうした

、トール。どこか具合でも悪いのか」

心配になつて、ウォーレンは聞いた。普段、トールはウォーレンにとつて煩わしい人物の一人だが（ダントツトップは父親であるガートン王である）、結構頼りにしているのだ。弱弱しい気配をトールから僅かに感じて、ウォーレンは狼狽えた。今ここで、ひとり、放り出されたら、困る。正直なところ、正気を保ってられるかどうかかわからない。フィーリーの面々の前では見せなかった、ウォーレンの本来の性質が顔を出しただのだ。

「いえ。大丈夫ですよ」

につこりしたトールの笑顔に陰りが差す。ウォーレンは、言葉をかけようとして、飲み込んだ。側に立つトールの背後。茜色の夕焼けが、地平線に沈むところだった。

ウォーレンの視線に気付いてトールが背後を振り返る。

「自然というものは、こんな色をしているのだな」

一日の大半は執務室で過ごす身だ。雄大な自然の中で、ゆっくりとした時間を過ごすのも悪くないかもしれない。ウォーレンは朱色に染まつた森林に嘆息した。

（しばし、羽を休めるか）

成長した鳥でさえ、長い距離を飛ぶには休息を必要とする。ウォーレンという鳥は、これから起こる大戦に向けて備えなくてはならないのだ。

「殿下、お休みなさいませ」
「ああ」

トールに与えられた空間はウォーレンの隣だ。何かあったら呼べばいい。いつもは呼ぶ前に気付く従者を、頼もしく思いながら、ウォーレンは網のベッドにゆっくりと身を横たえた。

「ユイアにも見せてあげたいですねえ」

（お前は本当に嫁バカだな）

ポツリと零した従者の言葉に、ウォーレンは頭の奥でツツコミを入れた。

七色に彩られた虹の橋に少女は立っていた。

雨上がり。森の天井。ウォーレンが見上げるほどに高いが、ドレスの中は見えない。雨露に飾られた茂みの陰で、生ける全ての者が歌う。少女に祝福を与えるような合唱。少女は指揮者であり、歌い手でもあった。大げさに両腕を振るい、さながらオペラのように声を響かせる。

鮮やかなグリーン。長い髪が揺れる。日の光を浴びて、少女がウォーレンに向かって微笑む。白光が目沁みる。眩しい、とウォーレンは思った。

（やっと捕まえた）

ウォーレンは少女に向かって手を伸ばす。

「メイヴィット殿！」

ウォーレンは叫んだ。しかし少女——メイヴィットは艶やかに笑うと踵を返し、ウォーレンの視界から消えた。
幕が上がる。

第三章、俺様王子と光の君 - 4

ウォーレンが目覚めると、トールが傍らに立っていた。視線が合うと、ほっとしたように息を吐き「失礼します」ウォーレンの額に手を当てる。

「どうした」

ウォーレンの呟きにトールの顔中の筋肉が弛んだ。

「いきなりメイヴィット様の名を叫ばれたので、どうしたのかと」
「そんなに大きな声だったのか？」

狼狽するウォーレンである。トールはおかしそうに目元を更に弛めた。

「私の眠る場所まで、あまり距離はありませんし、声が必至そうでしたよ。何の夢をご覧になっていたんですか」

「か、関係ないっ！ 断じてお前には関係ないぞ、トール」

「気になります」

「言わないからな！」

「気になります、ね、メイヴィット様」

「楽しそうじゃの」

トールの後ろから、視界にふっと湧いて出たメイヴィットに、ウォーレンは縄から落ちそうになった。慌てて体勢を整え、揺り籠から降りると、メイヴィットの手にはキスを落とす。

「おはよう、メイヴィット殿」

「うむ、お早う。何の話をしておったのじゃ？ 妾も混ぜてくれ」
「朝食の席でゆっくりと伺いたいことがある。良いかな？」

この際、トールの表情は見ないことにする。容易く想像できるからだ。腹が立つので、ウォーレンは脳裏に浮かんだトールの微笑みを消した。

「勿論じゃ。殿方の着替えに妾がいては悪い。先に参っておるぞ」

音を立てずに歩くメイヴィットの後ろ姿をウォーレンは見送った。

地面は相変わらず粉雪が積もったように白く、ふわふわしていた。ウォーレンは白い塊を掬ってみる。仄かにヒンヤリとした感触があるが、スタツピアの雪のように、手のひらの上で溶けたりしない。

太い枝のアーケードを抜けると、ひらけた大広間に出た。そよ風が耳を掠って、音が鳴った。ウォーレンは立ち止まって、目を瞑り、大きく伸びをした。

爽やかな朝の空気が心地よい。太陽はまだ昇り始め。空気は冷えて、夏の軍服には肌寒い程だ。思えば、フィーリーの入り口まで、山道を長い距離歩いて登ったのだ。ウォーレンはトールを振り返る。トールは黙って頷いてくれた。トールの肌は、いつにも増して白い氷のように。

「ウォーレン様、早くお座りになって。アタシお腹ぺこぺこなのよ
お」

既に席についているシーニィの声に、ウォーレンははっと我に返りテーブルに歩み寄る。

「お待たせして申し訳ない」
「全くだ」

今日もロキーナは不機嫌そうだった。ウォーレンとツールがテーブルにつくと、料理が運ばれてくる。皿だけが。

ウォーレンは運ばれてくる光景に圧倒された。料理の載った大皿だけが宙に浮いて、動いている？

ウォーレンは驚いて声すら出なかった。これも魔法なのかという考えがちらりと頭を掠めたが、感情がついていかなかった。

大皿がテーブルに置かれる瞬間、魔法の正体が現れた。人間の頭、ひとつ分くらいの大きさの羽の生えたエルフが、皿をゆっくりとテーブルに降ろしたのだ。背中から生える二対の羽は、薄い水色で向こう側が透ける程だ。

髪の毛はシーニイやロキーナと同じく金色で、どちらかというと白光のように光を反射している。皆、一様に髪の毛を縛っていたが、性別があるのか、花を頭に差してドレスを着ている者と、裾の窄んだパンツを履いている者がいる。ウォーレンがじつと見つめていると、皿を置き終わった彼らは、メイヴィットの周りをぐるぐる飛び始めた。

「妖精じゃ。妾の為にとてもよく働いてくれる。魔法の欠片が生み出した生き物じゃよ」

メイヴィットがふわり、と手を持ち上げると、妖精たちはキスをして、大広間から出て行った。

「喋らないんだな」

「妖精は話すことを必要としないのでな。でも唄は歌ってくれるぞ」

「妖精が歌うのはメイヴィット様の為だけだ。お前なんかには断じ

て聞かせてやらん」

テーブルの端で息巻くロキーナに、シーニイが生温い視線を投げ打った。

「それを決めるのはメイヴィット様でしょ、ロキーナ。ああ、ウォーレン、妖精の行動権は全てメイヴィット様が握っているのよ」

ウォーレンは頷いた。

「メイヴィット殿は愛されているんだな」

ウォーレンの発言に、シーニイが意味ありげにロキーナを見てから、笑った。

第三章、俺様王子と光の君 - 5

「ここにも熱心な崇拝者がいるわよん。この森自体がメイヴィット様の命そのものなの。森の主だからこそ、メイヴィット様は大地の声を聴き、配慮し、時には囁きを返すのよ。アタシたちはそれを補助するのが役目」

朝食はたっぷり身の詰まったベーグルサンド。ブルーベリーのジヤムと山羊のような癖のあるチーズが挟んであり、食べやすいように半円にカットされていた。飲み物は白いミルクのようなもの。ウォーレンは、最後に用意された、柔らかい感触の葉っぱをナプキン代わりにすると、テーブルを見渡した。皆がおもしろいおもしろい話をする中で、ウォーレンは適当に相打ちをしながら、木々のざわめきに耳を澄ませて、気になる音を見つける。さわさわという葉の擦れる音に混じって、シュツ、シュツという、何か空気を切る摩擦音が聞こえるのだ。トールに目配せすると、トールも怪訝そうに眉根を寄せた。

メイヴィットに問おうと、顔を向けた瞬間、シーニイの歓喜の声に阻まれた。

「カロちゃ〜ん。おっそいわよ〜。アタシたちもう済ませちゃったわよ」

枝のアーチの向こうから現れたのは、中肉中背の女性。肩に着く程度のストレートな髪は、木の幹を濃くしたかのよう。髪と同じ色の瞳がウォーレンを捕らえた。

「構わない。フィーリーへようこそ、スタッピアの友人方。どうぞゆっくりしてって下さい。メイ」

表情の読めない顔が、ウォーレンから視線を外した。ウォーレンの背を冷や汗が伝う。

「遅くなつてすまない。良くない事実を告げる託宣が出て占い直したら、こんな時間に」

「大丈夫じゃ、カロ」

メイヴィットが立ち上がる。ウォーレンもつられて、席を立った。

「紹介しようぞ。こちら我が国の参謀。占いを生業としておられる」

「初めまして。カロ、とお呼び下さい」

「よろしく、カロ殿。私のことはウォーレンと。こちらは従者のトール」

「カロ様。よろしくお願いします」

平生を装って自己紹介を試みたウォーレンだったが、やっぱりカロは眉ひとつ動かさない。

（落ち着け、俺！ 相手は女性、それもおそらく武術は身につけていない）

「ウォーレン様」

カロはウォーレンを真っ直ぐに見た。どこまでも続く闇。心の深淵。ウォーレンは恐怖を覚えて半歩、後ずさる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2414w/>

俺様王子の恋愛街道

2011年12月1日20時57分発行